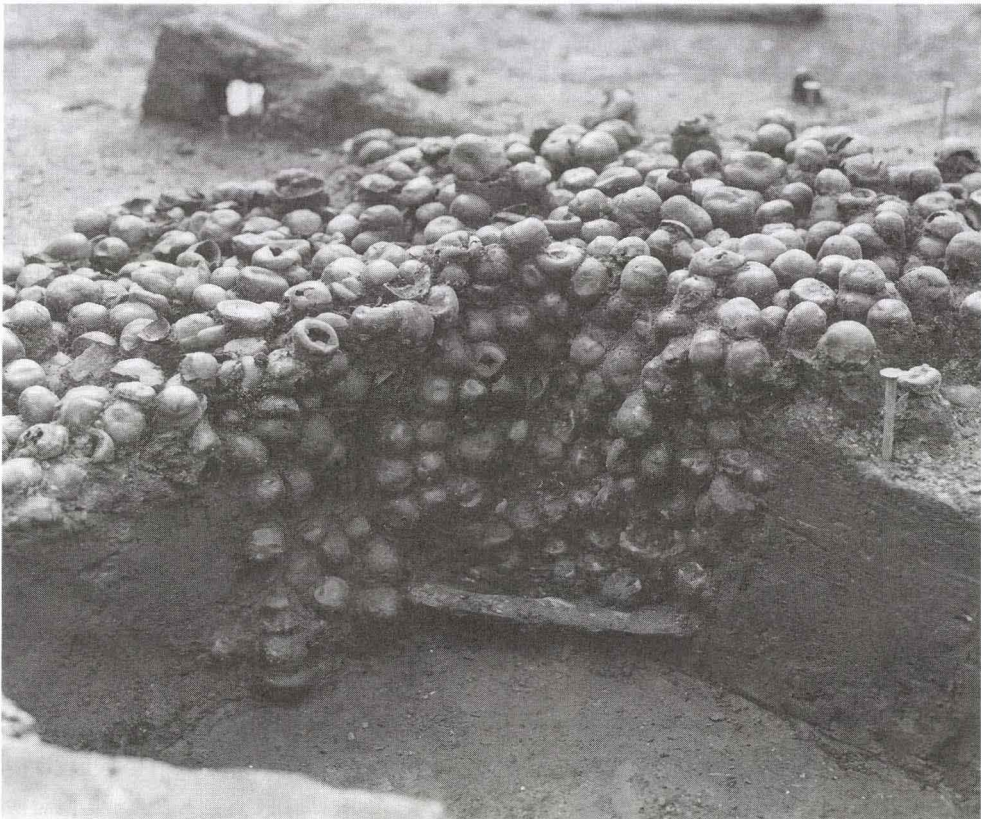


京大広報

No. 482

京都大学広報委員会



北部構内出土の縄文時代晩期のトチの実貯蔵穴（深さ 約 0.2 m） —関連記事本文927ページ—

目 次

<紹介>	訃報.....935
埋蔵文化財研究センター.....927	日誌.....935
<資料>	<随想>
平成6年度教育研究学内特別経費による	欧米旅行35年間のうつりかわり
研究課題.....928	名誉教授 三枝武夫.....936
—京都大学の百年（第7回）—	<コラム>
戦前の京大における博士学位.....934	全学共通科目のゆくえ
	山本利治.....937

＜紹介＞

埋蔵文化財研究センター

埋蔵文化財研究センターは、本学敷地内の埋蔵文化財に関する調査計画の立案，調査研究，保存および成果報告書の作成を行うことを目的として活動している。現在の構成はいずれも兼任で，センター長のもとに，助教授1名，助手5名のほかに非常勤室員4名となっている。本学敷地内での埋蔵文化財の発掘調査は，昭和52年以後，埋蔵文化財研究センターの指導のもとに京都大学構内遺跡調査会を主体に実施してきたが，平成4年3月をもって調査会は解散することになり，同年4月以降は，発掘調査から成果の報告に至る一連の事業を埋蔵文化財研究センターが実施することになった。ここでは当センターが北部構内で平成6年度に行った調査のうち，基礎物理学研究所研究棟新営予定地と農学部農芸化学校舎等新営予定地の2か所の発掘で出土した主な遺構・遺物について紹介する。

基礎物理学研究所予定地 ここでは，中世～近世の道路状遺構，中世の砂取穴，古代の溝や土坑などを検出した。

中世から近世にかけての道路状遺構は南北方向にのび，新旧2つの時期の道路を発見した。新しい道路は，逆台形に地面を掘削して造成している(写真1)。幅約4mで，2枚の路面が確認できた。古い道路は，新しい道路の造成によってほとんどが破壊されており，東側の端部を検出したにとどまった。砂質土をつき固めた4～5枚の路面が確認でき，長期に及ぶ利用が想定できる。江戸



写真1 中世～近世の道路状遺構 (幅約4m)

時代の絵図に，本調査区付近を南北にのびる道が描かれている例があり，今回検出した道路はこれにあたと想定している。

古代の溝の一画からは，一括して廃棄された平安時代中期(9世紀後半)の土器が見つかった。その種類と数量は，土師器(杯・椀・皿・高杯・甕・鉢)約100個体，黒色土器(椀・甕・鉢・片口)25個体，白色土器(椀・皿)5個体，須恵器(鉢・蓋)6個体，灰釉陶器(椀・皿・壺)26個体，緑釉陶器(椀・皿・香炉)12個体である。

緑釉陶器や灰釉陶器は東海地方の窯で生産されたものであり，流麗な印刻花文の施された優品も含んでいる。平安京郊外はもとより，京域内でもこの時期の土器の構成のわかる一括資料はきわめて乏しく，貴重な資料である。近くからは，この時期には珍しい緑釉陶器の托(受皿)も出土した(写真2)。これらのほか，平安時代前期の瓦類がまとまって出土したことや墨書の施された灰釉陶器が複数得られたことも注目される。

これら平安時代の遺構・遺物に関連するものとして，文献のうえからは神楽岡吉田寺があげられる。吉田寺は，『天台座主記』の「良源伝」貞元2(977)年4月7日条に，神楽岡吉田社北で，天台座主良源が舍利会を行ったという記述がみられる。実態は不明な部分が多いが，今回多量に出土した平安時代の資料は，この寺院に関連する可能性が高いと考えている。

農芸化学校舎予定地 中世の溝群，平安時代の墓，弥生時代の方形周溝墓，縄文時代の植物遺存体層やトチの実の貯蔵穴などを検出した。

方形周溝墓では，棺を収納した土坑は検出できなかったが，周囲を区画した方形の溝を検出し，その溝中より弥生中期前葉の土器が出土した(写真3)。さらに北側に別の方形区画の溝の一部も検出している。昭和53年度に行った，本調査区



写真2 平安時代の緑釉陶器托 (直径15.4cm)

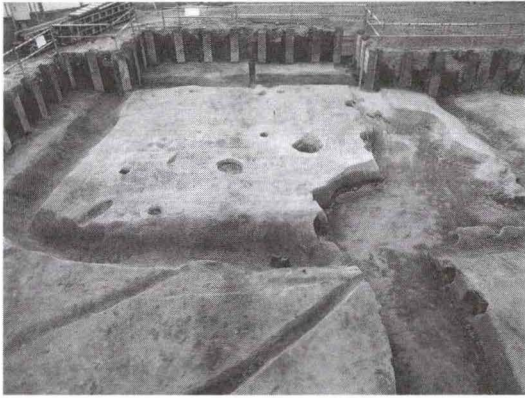


写真3 弥生時代中期の方形周溝墓
(南北約12m×東西約10m)

南西約80mの地点の調査で検出した同時期の3基の方形周溝墓と併せ考えるなら、この一帯が当該期に墓域として利用されていたと判断できる。

トチの実の貯蔵穴は縄文時代晩期のもので、旧流路の西側斜面に植物遺存体層を掘り込んで作られていた。検出面では1m四方前後の広がりを持ち、深さは約0.2mである。この穴のなかに、約2,000個のトチの実の種子がぎっしりと詰め込まれていた(表紙写真)。貯蔵穴の周辺からは、イチイガシを主とするドングリ類が多量に出土しており、トチの実も外果皮のついたままのものが多く、これらは自然の落下状態に近い状況を示すものであろう。こうした中から、トチの実を選択して採集し、外果皮をとりはずして、穴に詰め込んだものと想定できる。

昭和54・58年度に行われた本調査区の東に隣接する地点の調査で、縄文時代晩期の低湿地やヒトの足跡、昭和57年度に行われた本調査区の東約100mの地点の調査では、縄文時代中期の住居跡が発見されている。こうした成果から、この地に居住した縄文人は、東側の微高地上に住居をかまえ、その西側の本調査区を含む低地一帯を植物質食糧の採集の場などに利用していたと推測してきた。今回の貯蔵穴の発見はそれを裏づける確実な証拠であり、この地に居住した縄文人の空間利用を復元するうえで重要な手がかりとなった。

植物遺存体層は、通常の遺跡では残りにくい種実、木材、葉などを多量に含む泥炭質土で、昆虫遺存体も多数発見された。現在、木材・種実・昆虫の同定、花粉や珪藻の分析、堆積層中の礫の組成などの自然科学的分析を関連分野の諸先生、諸機関の協力を得て行いつつある。これらの成果と発掘調査による知見を総合することによって、周辺の自然環境の復元、そしてその中で縄文人が環境をどう利用していたかを明らかにすることができると考えている。

なお、発掘調査にあたっては、事務局および工事担当部局など多くの皆様から多大のご協力やご援助をいただいている。感謝の意を表するとともに、今後とも、埋蔵文化財研究センターの調査活動に対して、一層のご理解とご支援をお願いする次第である。

(埋蔵文化財研究センター)

<資料>

平成6年度教育研究学内特別経費による研究課題

本年度の教育研究学内特別経費による研究課題及び代表者等は、次のとおりである。

1. プロジェクト研究

研 究 課 題	代表者所属・職・氏名	参加者所属部局
全学共通科目実施状況および総合人間学部学生の履修状況に関する調査	総合人間学部 学部長 児嶋 眞平	総合人間
舎密局・三高関係の資料の整理と収納	総合人間学部 教授 川端 善明	人間環境
世界史の構想と歴史教育	文学部 教授 礪波 護	総合人間・文・東南ア・人文研

研 究 課 題	代 表 者 所 属 ・ 職 ・ 氏 名	参 加 者 所 属 部 局
教育学部の新カリキュラムを効果的に実施するための教育改善調査	教育学部 学部長 高木 英明	教育
近時の教育環境の変化と民法教育に関する総合的研究	法学部 教授 北川善太郎	法
大学院・学部における経済学・経営学の教育改善のための研究	経済学部 学部長 浅沼 万里	経済・経済研
ミニ博物館の開設	理学部 学部長 佐藤 文隆	理
物理実験教育の改革指針調査	理学部 教授 笹尾 登	理
先端的遺伝子解析技術の基礎生物学実験における試行	理学部 教授 佐藤 矩行	理・生態研・霊長研
医学における形態学教育のための三次元画像表示システムならびに画像解析システムの開発	医学部 教授 塩田 浩平	医・病院
病理組織画像情報のデジタル化による教育材料環境の整備	医学部 助教授 高橋 玲	医・病院
薬物血中濃度モニタリングに関する教育研究のための基盤整備	病院 教授 乾 賢一	病院
肝臓外科症例検討会の定期開催による卒後教育、生涯教育の充実	病院 教授 山岡 義生	病院
脳神経外科手術の Audio-Video system による教育	病院 教授 菊池 晴彦	病院
実験動物を用いる薬学教育・研究の改善	薬学部 教授 赤池 昭紀	薬
工学部—工学研究科学生向け教務関係情報伝達システムの開発研究	工学部 教授 長尾 真	工
工学部シラバスのデータベース化と活用に関する開発研究	工学部 教授 富田 真治	工
コンピュータネットワーク・サブランを利用した情報処理教育システムの開発	農学部 教授 佐々木義之	農・演習林
食品・生物工学分野における物性教育の改善	農学部 教授 松野 隆一	農・工
計算科学技法を用いる化学反応のモデリングによる視覚教育に関するプロジェクト	人間・環境学研究科 教授 松本 澄	総合人間・人間環境
分子生物学実験における放射性同位元素の安全取扱教育方法の確立	放射性同位元素総合センター センター長 栗原 紀夫	総合人間・医・人間環境・放同セ
本学の環境保全に関する英文版教材の作成	環境保全センター センター長 竹原善一郎	環境保セ
高速ネットワーク (FDDI) を活用した多地点間画像データ転送に関する研究	情報処理教育センター センター長 矢島 脩三	情報
衛星データと地理情報解析による地域研究の手法開発	アフリカ地域研究センター センター長 田中 二郎	アフリカ・東南ア
大学教授法の総合的研究	高等教育教授システム開発センター 教授 梶田 毅一	高等教育・教育
アジア・アフリカ地域に関する大学院教育のあり方	東南アジア研究センター 教授 吉原久仁夫	文・アフリカ・東南ア・人文研

研 究 課 題	代 表 者 所 属 ・ 職 ・ 氏 名	参 加 者 所 属 部 局
入試問題検討のための教科書の購入	学 生 部 部 長 瀬地山 敏	学生部
「運動・健康教育」に関する測定・評価システムおよびカリキュラムの再検討	体育指導センター 助教授 山下 謙智	総合人間・医・体育指導セ
京都大学施設長期計画策定の調査研究	施 設 部 工学部 教 授 川崎 清	工・施設部
視聴覚機器一式 (LL システム)	総合人間学部 助教授 稲垣 直樹	—
京都大学文学部博物館所蔵先史時代資料の展示効果について	文 学 部 助教授 山中 一郎	文・教育・法・人文研・埋 文セ
実証的憲法史研究	法 学 部 教 授 大石 眞	法
植物系統保存とデータベース化	農 学 部 教 授 遠藤 隆	農
遺伝子診療を視野にいた、感染性ペクターを用いる組換え DNA 実験の安全性確保に関する広範な情報の収集	遺伝子実験施設 教 授 清水 章	医・遺伝子・ウイ研
虚心性心疾患に対する集団スポーツ方式によるリハビリテーションに関する多面的調査研究	医療技術短期大学部 教 授 藤田 正俊	総合人間・医・病院・工・ 医短大
DNA 診断推進のための基礎研究	化学研究所 教 授 上田 國寛	医・医短大・化研
「中国の礼制と礼学」共同研究班の研究報告出版	人文科学研究所 教 授 小南 一郎	人文研
新しい作用機序による抗癌剤／放射線増感剤の開発とスクリーニング	胸部疾患研究所 教 授 高橋 正治	工・医・胸部研
タンパク質の構造・機能研究のための新しい解析技術の開発	食糧科学研究所 教 授 広瀬 正明	理・工・農・食研
京都大学キャンパス内における広帯域地震動予測と建造物耐震再評価に関する研究	防災研究所 教 授 入倉孝次郎	総合人間・理・工・防災研
細胞増殖と細胞分化の制御の分子メカニズム	ウイルス研究所 教 授 西田 栄介	胸部研・ウイ研
資産蓄積と超長期経済動学	経済研究所 教 授 西村 和雄	経済・経済研
霊長類の加齢老化	霊長類研究所 教 授 木村 賛	総合人間・理・霊長研
創設期京都帝国大学についての研究	附属図書館 館 長 朝尾 直弘	総合人間・文・法・工・人 間環境・図書館
実践的健康教育の構築 —肥満予防と栄養指導—	保健管理センター 所 長 森下 玲児	保診・保健管理セ
高等教育機関の組織運営に関する比較研究	法 学 部 教 授 村松 岐夫	教育・法・経済
総合診療支援の情報システム化に関する研究	病 院 教 授 福井 次矢	病院
京都大学将来構想における工学部・工学研究科の役割に関する調査研究	工 学 部 教 授 曾我 直弘	工
21世紀における農学教育及び研究の将来と一般社会への総合理解	農 学 部 教 授 石田祐三郎	農・農場・演習林

研 究 課 題	代 表 者 所 属・職・氏 名	参 加 者 所 属 部 局
大学附置研におけるエネルギー研究のあり方	原子エネルギー研究所 所 長 高橋 幹二	工・ヘリオ・化研・原エネ 研・原子炉
KUINS を利用した CD-ROM ネットワーク 検索システムの構築	附属図書館 館 長 朝尾 直弘	医・大型・図書館
学生部の在り方検討のための関係図書購入	学 生 部 部 長 瀬地山 敏	学生部
自己評定による全京大生の性格の30年間の 推移	学 生 部 保健管理センター 助教授 岨中 達	情報・学生・保健管理セ
京都大学におけるキャンパス問題について の調査研究	新キャンパス委員会 委員長 工学部 教 授 中川 博次	新キャンパス委員会
21世紀の京都大学のあり方についての調査 研究	将来構想検討委員会 工学部 教 授 中川 博次	企画小委員会 将来構想検討委員会
図書購入費	図 書 館 館 長 朝尾 直弘	—
A～E号館講義室机椅子等の改修	総合人間学部 学部長 児嶋 眞平	—
中、上級学習者向けビデオ、レクチャー形 式日本語教育のためのスクリプト及び用語 集の作成、同レベル学習者向け聴解教育の 録音編集を含む教材開発	留学生センター センター長 瀬地山 敏	留学生セ
全学生1人1台時代へのネットワーク環境 技術に関する調査研究	情報処理教育センター センター長 矢島 脩三	情報
学生・大学院生の学習・研究をサポートす る大学システムの在り方に関する研究	学 生 部 部 長 瀬地山 敏	学生部
大学教育評価システムの開発	高等教育教授システム開発センター センター長 岡田 渥美	高等教育

2. 学術研究奨励金

【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属・職・氏 名
ローマ帝国の政治支配層に関する社会史的研究	文 学 部 助 教 授 南川 高志
バイリンガルの言語と認知	教育学部 助 手 石王 敦子
京大環太平洋モデルによるアジア経済とりわけ中国経済の成長予測と海外 投資の効果分析	経 済 学 部 助 教 授 大西 広
チンパンジーにおける Action-Centered attention の比較認知的研究	霊長類研究所 助 手 友永 雅己

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属・職・氏 名
細胞の酸化的ストレス応答とその制御機構に関する研究	理 学 部 助 手 張 秋 梅
ペプチドライブラリーを用いたT細胞エピトープの解析	理 学 部 助 手 宇高 恵子
サル大脳皮質補足運動野の大脳基底核における体部位局在配列 (Somatotopy)	医 学 部 講 師 高田 雅彦

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
遺伝性神経変性疾患の原因遺伝子の同定とモデル動物の開発	医学部 講師 垣塚 彰
発癌と腫瘍における活性酸素の意義に関する総合的研究	医学部 講師 豊國 伸哉
giant membrane patch 法による Na^+ - Ca^{2+} 交換蛋白 (NCX1) のキネティクスの解析	医学部 助手 松岡 達
ショックにおける内皮由来血管作動性ペプチドの臨床的意義	医学部附属病院 助 手 白神豪太郎
マイナス鎖 RNA ウイルスの cDNA 発現系を利用した RNA 複製系の確立	薬 学 部 助 手 森本金次郎
ムラサキ培養細胞における二次代謝の光制御に関する分子生物学的研究	薬 学 部 助 手 矢崎 一史
麻薬依存形成および退薬時における脳内受容体間相互作用	薬 学 部 助 手 南 雅文
生体内におけるプロスタグランジン E 受容体サブタイプの局在と機能に関する研究	薬 学 部 助 手 杉本 幸彦
酵母の新しい異種遺伝子発現系の利用：オルガネラ形成・有用タンパクの発現と分子シャペロン	農 学 部 助 教授 阪井 康能
有害赤潮の微生物学的防除法の開発—赤潮渦鞭毛藻ギムノダイニウム・ナガサキエンセ殺滅細菌による殺滅機作の解明—	農 学 部 助 手 吉永 郁生
ニューロンの発生・分化・生存維持における赤血球分化増殖因子エリスロポエチンの機能の解明	農 学 部 助 手 増田 誠司
能動ぬるぬる表面の作製とその臨床応用に関する研究	生体医療工学研究センター 助 教授 富田 直秀
転写活性化タンパク (NF- κ B/Rel) を制御する抑制タンパク (I κ B) に関する研究	化学研究所 助 手 安達 喜文
抗体触媒を用いた化学発光に関する研究	化学研究所 助 手 平竹 潤
遷移状態アナログ・グルタチオン合成酵素複合体の X 線結晶構造解析	化学研究所 助 手 加藤 博章
慢性喫煙による肺気腫症の発生機序とタバコ感受性に関する研究	胸部疾患研究所 講 師 西村 浩一
熱ショック蛋白質 HSP47 のプロモーター領域の解析	胸部疾患研究所 助 手 細川 暢子
リグニン生合成における立体化学的制御機構の解明	木質科学研究所 助 教授 梅澤 俊明
分裂酵母の複製開始因子の同定と解析	ウイルス研究所 助 教授 村上 洋太
細胞周期 M 期における細胞接着斑蛋白質 paxillin の特異的分解およびその分子機構の解析	ウイルス研究所 助 教授 佐邊 壽孝
マウス乳癌ウイルス変異株の白血病原性獲得の分子機構の解析	ウイルス研究所 助 手 柳川 伸一
前頭連合野における作業記憶マップとその変動の解析	霊長類研究所 助 手 澤口 敏之

【理学・工学】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
曲がった空間上の場の理論と時空への反作用	総合人間学部 助 教授 早田 次郎
琵琶湖での物質循環をつかさどる沈降粒子束	総合人間学部 助 教授 杉山 雅人

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
層状超伝導体の混合状態における磁束構造	理 学 部 助 手 伊 東 裕
超低温度における量子固体結晶の成長過程の可視化	理 学 部 助 手 佐 々 木 豊
レーザー冷却原子を用いた空間・時間反転対称性の破れの検証	理 学 部 助 手 高 橋 義 朗
乱流中に見られる秩序形成と秩序の動力学的解明	理 学 部 助 手 藤 定 義
Abrilsov-Nielsen-Olsen の渦紐の「位相的」定式化とその応用	理 学 部 助 手 矢 彦 沢 茂 明
X線衛星による広域深宇宙探査の光学追究	理 学 部 助 手 太 田 耕 司
X線の 1/f ゆらぎによるブラックホールの存在証明	理 学 部 助 手 嶺 重 慎
沈み込み帯における地震の発生メカニズムの研究	理 学 部 助 手 久 家 慶 子
新しい有機超伝導体成分分子の開拓	理 学 部 助 手 矢 持 秀 起
超高压変成岩の上昇過程	理 学 部 助 手 Simon Wallis
II-VI族化合物半導体低次元構造における励起子ダイナミクスの研究	工 学 部 助 手 川 上 養 一
より現実のニューロンの動的性質を反映させたモデルニューロンによる神経回路網の基礎的研究	工 学 部 助 手 青 柳 富 誌 生
分子サイズ・形状選択性を有する光触媒反応系の開発	工 学 部 助 手 大 谷 文 章
細胞から人工脂質膜への膜タンパク質の移行に関する研究	工 学 部 助 手 奥 村 幸 久
カザフスタン共和国乾燥地域における広域蒸発散量指定に関する大気水文学的研究	農 学 部 助 手 大 手 信 人
核と葉緑体遺伝子系間のシグナル伝達の分子機構	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 助 手 椎 名 隆
活断層破砕帯にトラップされた地震活動の検出の試み—活断層面上での2次元破壊強度分布トモグラフィーに向けて—	防 災 研 究 所 助 手 西 上 欽 也
高速回転する原子核の励起状態と回転バンド構造の消滅	基 礎 物 理 学 研 究 所 助 手 松 尾 正 之
一様せん断流内の渦層の巻き上げの研究	数 理 解 析 研 究 所 教 授 岡 本 久

3. 学術出版助成金

【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
重度心身障害児の発達と療育—対象的活動の高次化に基づく発達の階層構造理論の展開—	総 合 人 間 学 部 助 手 田 中 真 介
Local Economy and Entrepreneurship in Thailand; A Case study of Nakhon Ratchasima	東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー 助 手 上 田 曜 子

【医学・生物】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 ・ 氏 名
紀伊大島植物目録	農 学 部 附 属 農 場 助 手 梅 本 信 也

—京都大学の百年（第7回）—

戦前の京大における博士学位

京都大学が最初に博士学位の授与に関わったのは、京都帝国大学創設後間もない明治32（1899）年のことであった。この年、難波 正以下5名が工学博士の学位を、また猪子止戈之助が医学博士の学位を授与されている。翌33年の学位授与は理学博士1名のみであったが、34年には法学博士10名を筆頭に、医学・工学博士各3名、理学博士2名、計18名の博士が一挙に誕生している。注目すべきは、以上の25名のうち24名までが京都帝国大学分科大学の教授であり、残る1名も後に教授となっていることである。

旧制大学時代の我が国の学位制度の歴史は大正9（1920）年を境に二つの時期に分けられる。まず明治20年の第1次学位令を改正した同31年の第2次学位令によると、博士の学位は文部大臣によって下記の者に授与されることになっていた。すなわち、第1は、帝国大学大学院に入り「定規ノ試験」を経た者、第2は、論文を提出して学位を請求し教授会から大学院修了者と同等以上の学力ありと認められた者、第3は、博士会において学位を授けるべき学力ありと認められた者、第4は、帝国大学分科大学教授で、当該帝国大学総長の推薦を受けた者、である。

以上のうち京大が関与するのは第1、第2と第4の手続きによる学位授与であるが、それらは実際にどの程度の数に上ったのであろうか。『京都帝国大学一覽・昭和7年』の学位録によると、明治32年から大正9年までの21年間（以下第1期と呼ぶ）に京大が授与に関係した博士学位の総数は313件（年平均15件）である。これを分野別に見ると、医学博士が191件（61%）と圧倒的に多く、以下、工学（41）、法学（34）、文学（26）、理学（21）の順になっている。次に取得方法の別を見ると、総長の推薦によるものが194件、論文提出によるものが119件であり、後者の中には大学院修了資格によって学位を取得した者（「課程博士」ともいうべきもの）が含まれていたが、その数は少なかった。総長推薦博士と論文博士の割合は分野によって著しく異なる。すなわち、医学博士では全体の87%までが論文博士であるのに対して、理学博士では総長推薦博士と論文博士とがほぼ相半ばしており、工学博士では2対1の割合で推薦博士の方が多く、文学博士では推薦博士21件に対して論文博士は5件、法学博士では推薦博士33件に対して論文博士は1件にすぎないのである。この第1期に京大が関与した学位授与の中では、同時期の東大と比べても総長推薦博士の比率が著しく高い（梶田明宏「学位に関する統計」、『東京大学史紀要』第5号、1986年参照）。特に明治期の京大では、医学博士を例外として、分科大学教授に対する総長推薦の学位授与が圧倒的な比重を占めていた。ここで留意しておくべきは、この時期の京大教授のすべてが京大で学位を得たわけではないことである。明治～大正期の京大教授の多くは東大の出身であり、彼らの中には母校に論文を提出して学位を取得する者が少なくなかったのである（岩田弘三「戦前期における学位の性格」、筑波大学『大学研究』第9号、1992年参照）。

さて、上述の学位制度は、大正9年の第3次学位令によって大幅な変更を受けることになる。すなわち、従来とかく批判のあった博士会や総長による推薦博士制は廃止され、学位を授与されるためには、大学院において2年以上研究に従事し論文を提出して教授会の審査に合格するか、論文を提出し教授会によりこれと同等以上の学力ありと認められることが必要になった。ここでも博士学位と大学院の連結が目指されているが、実際に大学院修了資格によって学位を取得した者はこの後も多くはなかったようである。新しい学位令はまた、学位の授与権を文部大臣から、審査に当たった大学に移すとともに、学位を授与された者に対して6か月以内に提出論文を印刷公表することを義務づけた。

この新制度による博士学位授与はその後昭和37（1962）年まで行われることになるが、いま大正10年から昭和16年までの21年間（第2期）に新制度によって行われた博士学位授与数を見ると（昭和27年刊『京

都大学学位録』参照), 総数2,686件(年平均128件)であり, 第1期に比べて8倍以上に激増している。分野別では, 医学博士が2,197件(82%)と一層比重を増しており, 以下, 理学(214), 工学(147), 文学(59), 農学(29), 経済学(22), 法学(18)の順になっている。第2期には, 医学のほか理学や工学でも学位取得者の中で学外者が圧倒的多数を占めるようになるが, 文・法・経の各分野では京大の教官がなお全体の40~50%を占めていた。また昭和期に入ると, 第1期から論文博士の比率が高かった医学部や理学部だけでなく, 文学部や経済学部でも教授就任以前に学位を取得するケースが一般的になっている。

(百年史編集委員会 服部春彦)

訃報

畠 昭治郎 名誉教授

本学名誉教授 畠 昭治郎 先生は, 2月19日逝去された。享年68。

先生は, 昭和26年京都大学工学部機械工学科を卒業, 同大学大学院で学ばれた後, 同大学講師, 助教授を経て昭和40年教授に就任, 平成2年停年により退官され, 京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間, 昭和63年4月より平成2年3月まで本学附属図書館商議員として, 大学の管理運営に貢献された。

先生は建築機械, 中でも建設機械による地盤掘削に関する研究において数多くの優れた研究業績を残され, その発展に寄与されるとともに, 近年の社会基盤の整備における機械化施工の合理化と高度化の分野において多大の貢献をされた。主な著書に『土木施工学』, 『建設機械学』等がある。

また, 地盤車両系国際学会, 日本建設機械化協会, 土質工学会, テラメカニックス研究会などにおいて, 会長, 理事, 支部長等の要職を歴任された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学部)

土屋 健治 東南アジア研究センター教授

東南アジア研究センター教授 土屋健治 先生は, 2月27日逝去された。享年52。

先生は, 昭和41年東京大学教養学部を卒業され, 引き続き同大学院で学ばれた後, インドネシア国立ガジャマダ大学に留学, 昭和48年千葉大学人文学部助手, 昭和49年本学東南アジア研究センター助手, 昭和53年同助教授を経て, 同63年同教授に就任された。

この間, 先生は, 本来の専門である国際関係論, 政治学の分野を越えて, 東南アジアの地域研究者として指導的役割を果されてきた。特に, 政治文化, 思想面の研究推進の必要性を強調して, 文化分析的手法を地域研究, 政治学に導入した功績は極めて高く評価されてきた。主な著書に『インドネシア民主主義研究』, 『カルティニの風景』, 『インドネシア思想の系譜』等がある。

先生はその真摯な研究姿勢は, 後進の研究者に対して大きな指針となっており, また, その優れた指導力によって, 我が国の地域研究の発展に貢献された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(東南アジア研究センター)

日 誌

(1995年2月1日~2月28日)

- 2月7日 評議会
- 21日 評議会
- 〃 京都大学後援会助成事業検討委員会
- 22日 安全委員会
- 25日~26日 入学者選抜学力試験(前期日程試験)

